

---

# 超会！ スピンオフ

シクル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超会！ スピンオフ

### 【Nコード】

N7414Z

### 【作者名】

シクル

### 【あらすじ】

超常現象                      通常では起こり得ない常軌を逸脱した現象：  
…そんな現象が頻繁に起こる町、蝶上町。しかし、超常現象への対策のため町内で密かに活動する者達がいた。彼らは超常現象解決委員会、通称                      超会。

Pixivに掲載している連載作品「超会！」のスピンオフ集（加筆修正版）です。

「超会！」本編はこちら

<http://ncode.syo>

s  
e  
t  
u  
.  
c  
o  
m  
/  
n  
5  
7  
8  
7  
i  
/

## 願いを叶える紫鏡（前書き）

この作品はあらずじにもある通り、連載作品「超会！」のスピノフ作品集です。

基本的に本編未読でも問題がないようにしてありますので、本編未読の方も気にせずどうぞー！

よろしければ本編の方もよろしくお願いいたしますm（――）m  
http://ncode.syosetu.com/n5787i/

## 願いを叶える紫鏡

「ねえ、『願いを叶える紫鏡』って、知ってる？」

昼下がりの教室で、一人の少女が隣の席に座っている少女にそう問いかけると、その少女はコクリと頷いた。

「知ってる知ってる、あの願いを叶えてくれるやつでしょ？」

「うん。紫色で、鏡の中央にヒビが入ってるらしいんだけど、あの鏡に自分の血を一滴落として願い事を言うと、叶えてくれるんだって！」

半ば興奮気味にそんなことを言う少女に、もう一人の少女は思わず苦笑する

「でも、それじゃ何でもし放題じゃん。例えば、世界征服とか出来ちゃうわけ？」

「ううん。大き過ぎる願いを言うと、逆に叶わなくなっちゃうんだってー」

少女の言葉に、もう一人の少女はふうん、と適当に答えると、やや興味なさげに窓から外の景色を眺め始めた。

それを見、鏡の話をしていた少女は向こうにあまり興味がないことに気が付いたのか、小さく嘆息して一言だけ呟く。

「欲しいなあ、紫鏡」

その言葉に、もう一人の少女はそうだね、と視線を戻さないままに頷いた。

親に頼まれた買い物物の帰り道、私はそんなことを思い出しながらキャベツやらニンジンやらの入った買い物袋を提げて歩いていた。「願いを叶える紫鏡」だなんてヘンテコな噂、よくもまあ信じる気

になるものだ。

「あり得ないわ」

そんなことを呟いて、私 河瀬詩安は歩を進めた。と同時に風が吹き、私の長い黒髪を舞わせる。それを空いている左手で押さえつつ、私は小さく溜息を吐いた。

そんな妙な鏡で願いが叶うなら、誰も苦労しない。いくらここが蝶上町だとは言え、流石にそこまで都合の良い物は落ちていないだろう。

私の住む町、蝶上町は少し……というかすごくおかしい。現実では起こり得ない現象 超常現象がこの町では頻繁に起きるのだ。頻繁、と言う程でもないかも知れないけど、少なくとも他の町や地域に比べれば、この町の超常現象発生数は異常だと思う。

そんな町だからこそ、その紫鏡が実在してもまあ、おかしくはないかも知れない。でも実物を見ないことには、信じる気になれない程、その話はあまりにも拾った人間にとって都合が良過ぎるし、荒唐無稽だった。

そんなことを考えている内に、自宅のある団地の入り口まで辿り着いていた。重い買い物袋を右手から左手に持ち直し、ゆっくりと歩を進める。けど、ふと気になる物が視界に入り、私はピタリと足を止めた。

「鏡……？」

溝の中に、手鏡が一つ落ちていた。ヘンテコな装飾のされたその鏡の淵は紫色で、鏡の部分の中央にヒビが入っていた。

「これって……」

思わず拾い上げ、それをまじまじと見つめる。紫色で、鏡の中央にヒビのある鏡……今日学校で聞いた噂の「紫鏡」と特徴が一致している。鏡には、訝しげな表情を浮かべた私の顔が映っていた。

「結局、持って帰っちゃった……」

自室のベッドに寝転がり、今日のお使いの帰りに拾った鏡を眺める。装飾が妙なのと、中央にヒビがあること以外はタダの鏡と何ら変わりがない。

あの鏡に自分の血を一滴落として願い事を言つと、叶えてくれるんだつて！

名前すら忘れてしまうような、クラスメイトの女の子の言葉が、私の脳裏を過る。

「超会ちょうかいに持つてた方がよいね……」

呟きつつ、私は身体を起こしてベッドから出ると、デスクについた。

超会。というのはこの蝶上町に存在する非公式団体、超常現象解決委員会のことで、ボスこと藤堂鞘子さんがリーダーを勤める、この町の超常現象を解決するための会のことだ。私もそのメンバーの一人なわけで……もしこの紫鏡の噂が本当なら、それは立派な超常現象、超会の会議に持つていくべきだと思う。

余談だけど、委員会ってというのはある機関や団体から権限執行などを任された人達のことだから、超会は厳密に言つと委員会じゃないですよ？ というのを少し前にボスに話したら、わりと真剣に「ノリでつけたから良いのよ」と言われた。

どんだけ適当なのよ。

「願いを叶える、ねえ」

呟き、私は机の引出しからカッターを取り出すと、刃を出して自分の左人差し指に向けた。

「……………」

少しためらったけど、結局カッターで左指を少しだけ切りつけた。赤い血が、傷口からジワリと滲み始めたのを確認すると、私は紫鏡へ左指の血を一滴落とす。

「っ！」

すると、落とされた血は鏡の中へ吸い込まれるようにして消えてしまった。普通ならあり得ないその状況に、私は数秒、啞然とした

まま鏡を見つめていた。

願い事、言わなきゃ。

「え、えっと……学校で、久々津君くつひろと話が……したいです」

ボソリと。まるで呟くように願い事を鏡に伝えた。けど、当然何かが起こるハズもなくて……

「ばっかみたい」

鏡をやや乱暴に机の上に置いて、ベッドへ再び寝転がる。

「あんなもの使わなくなつて、別に久々津君とは会話出来るし……」  
久々津弘人くつひろとは、超会のメンバーの一人で、現在唯一の男性メンバー。別に超会の会議に行けばいつでも話せるから、わざわざ学校で話す必要もないのだけど……。

「はあ……」

小さく嘆息して、私はそのまま眠りについた。

三時間後、深夜に目を覚ました私が、明日提出の課題をやっていないことに気付いて焦りまくるのだけど、それはまた別のお話。

「はあ……」

小さく溜息を吐きつつ、両手で大量のゴミが詰まったゴミ袋を提げて、私は学校の廊下を歩いていた。放課後の教室掃除の仕上げに、ゴミ箱にたまつたゴミをゴミ捨て場に捨てに行くんだけど、残念なことじゃんけんで負けてしまった私はその役目を任されることになつてしまった。

結局今日一日、学校で久々津君と会うことはなかった。会うどころか、見かけることすらない。まあ休憩時間に、教室から一步も外に出ないのだから会えるわけがないといえはそうなのだけど……。

馬鹿馬鹿しい。



ゴミ袋を一度床におき、昨晚傷つけた自分の左指を見つめた。血はもう出ないけど、触ると少しだけまだヒリヒリする。やっぱり絆創膏貼つとけば良かったかなあ、などとボンヤリ考えつつ、私はもう一度両手でゴミ袋を持ち直した。その時だった。

「ん、詩安じゃねえか」

不意に背後から呼ばれて、少し驚きつつ振り返ると、そこにいたのは久々津君だった。特別背が高いわけでもなく、あまり特徴のない……といえば少し言い方が悪い気がするけど、ホントに平凡な感じの男の子。超会にいる時は、ブレザーを脱いでるんだけど、流石に校内では上着もちゃんと着ていた。

「あ、え、久々津君……？」

ちよつと声がひっくり返ってしまった。

「珍しいな、学校で会うなんて」

「それは……」

少し緊張して口籠る私の顔を、久々津君は不思議そうな表情で見つめている。

何やってるんだろう……。超会の会議で会った時みたいに、自然に話せば良い。ただ、それだけなのに……。

「それは……私が久々津君を避けてるからよ」

「俺何か避けられるようなことしたっけ!？」

「私見たんだから……久々津君が仮面ライダーチップスの、カードの部分だけ抜き取って残りのお菓子ドブに捨ててるところ!」

「してねえよ! ライダーチップスブーム当時の小学生か俺は!」

「他にも、ビックリマンチョコのウエハースチョコ捨てて、シールを食るように食えるところとか」

「どうせ食うならちゃんとウエハース食うわ! シールなんか誰が食べるか!」

「酷いわ久々津君。世の中にはシールすら食べられない子供達がいるのよ……?」

「そもそもシールは食べ物じゃねー!」

アホな会話だった。

いつものように久々津君とアホな会話をした後、ゴミ袋を運ぶのを手伝ってもらって（というか久々津君が持ってくれた）、その後別れて、またいつものように超会の会議で会ったんだけど……

「本物……？」

今日の出来事を思い出しつつ、昨日と同じように机につき、昨日拾った紫鏡をまじまじと見つめる。この鏡の力かどうかは判断出来ないけど、確かに私は今日、昨日願った通り「学校で久々津君に会う」ことが出来た。偶然のような気はするけど……。

もう一度試してみよう。そんな考えが私の中に浮かんだ。

「効果が本物か、確かめないとね……」

まるで言い訳でもするかのように呟いて、私はカッターを取り出すと左手の中指を傷つけた。そして滲んだ血を、鏡へと落とす。鏡は昨日と同じように、落とされた私の血を吸い取っていった。

「明日は、久々津君と一緒に……帰れますように」

小さな声で、鏡に向かって私はそう言った。

「それでその亀山がな、こないだ神社の周りで、白髪の少女を見たって言ってたんだけど、やっぱそれってシロのことだと思うんだよね」

「え、ええ……白髪の少女って、シロくらいだし……」

顔もまともに見れないまま、彼の言葉に返事をする。私の頭の中はシロの目撃情報どころじゃないんだけど……

「だよなあ……。でも何だって神社付近に……」

妹の理安を迎えに行くため、彼女の通っている中学校へ向かい

つ、私は久々津君とそんな会話を交わしていた。

そう、久々津君と。

「そういや、初めてだよな。こうやって一緒に帰るのって……結構機会がありそうなもんなのに、今まで一度もなかったって何か不思議だよな！」

久々津君と「一緒に」下校中。

「ん、どうした？ 今日口数少ないな……」

まともな会話が出来ず、うつむいたままにいる私の顔を、久々津君は怪訝そうな表情で覗き込んだ。

「そんなことはないわ。久々津君こそどうしたの？ 鳩がロケランくらったみたいな顔して」

「してねえしどんな顔だよそれ！ 鳩がロケランくらったら顔どころか全身吹き飛ぶわ！」

「ロケランくらっても、久々津君なら大丈夫。男の子でしょ」

「男だろうが女だろうが大丈夫じゃねえよ！」

「男の娘でしょ？」

「女装したことは一度もねえししても似合わねえ！」

「あの男の子でしょ？」

「どの男だよ！？ 昼ドラ的な展開になんな！」

「男の粉でしょ？」

「どんな粉末だよ！？ 気持ち悪いわ！」

「オオトコノシヨデ？」

「せめて日本語で喋れー！」

結局いつものノリだった。

願いを叶える紫鏡。自分の血を一滴鏡に落とし、その血を吸った鏡へ願いを伝えることで願いが叶う。胡散臭い、ただの噂話だとは思えない話だったけど……私が拾った紫鏡は、二度も続けて私の願いを叶えて見せた。どちらも偶然、といえば偶然なのかも知れない。だけど、その「偶然」が起こる前日に、私が紫鏡へ願いを伝えたのは確かだった。

人間というのは、自分にとって都合の良い方を信じてしまうもので、私も御多聞に漏れず都合の良い方　紫鏡が本当に願いを叶える、という考えの方を信じてしまったようで、私は毎日のように紫鏡へ小さな願いを伝え続けた。

毎日久々津君と帰りたい。

ちよつとしたことで喧嘩してしまった理安に、謝るきっかけが欲しい。

お小遣いの前借りがしたい。

応募した懸賞に当選したい。

いくつもの願いを鏡へ伝え、鏡はそれらを全て叶えてくれた。

大き過ぎる願いを言くと、逆に叶わなくなっちゃうんだ

ってー。

あの時、この鏡の噂をしていた女子生徒は確かにそう言っていた。だから叶わなくなってしまうのが怖くて、私は一度も大きな願いを鏡に伝えたことはなかった。

小さな願い、ばかり。

やがて私の中で、「小さな願い」は叶うのが当たり前になってしまっていた。だから、小さな願いしか叶えられない鏡に、私はいつしか不満を持つようになってしまっていた。

「詩安、お前なんか最近顔色悪くないか？」

放課後、いつものように一緒に帰っている途中、久々津君は私の顔を見てそう問うた。

「そう……かしら？」

「やせてるというより、やつれたって感じの顔してるぞ、お前。なんかフラフラ歩いてるし」

そういえばこの間、そのことはクラスの友達にも言われた。最近やつれている、フラフラ歩いていて危なっかしい、と。理安にいたっては学校を休んだ方が良く、とまで私に言うのだ。

大丈夫なんだけどなあ……。

「今日はもう帰った方が良くんじゃないか？ 理安は俺が超会まで連れてくから」

「うん、久々津君がそういうなら……」

久々津君に言われた通り、その日は超会本部へ向かわず、大人しく家へ帰ることにした。

久々津君にやつれている、と言われてから、私は最近自分に食欲がないことを自覚した。それに何だか、イライラする。何でもないハズなのにムシャクシャして、理安や両親に八つ当たりしてしまう。食欲は湧かないし、何もやる気が起きないし……久々津君は、私に何も言ってくれないし。これだけ何度も一緒に帰って、放課後も一緒にいて、休日だって何度か鏡の力で一緒に過ごしたことがある。それなのに

久々津君は、私を好きだと言ってくれない。

イライラするのは久々津君のせいだ。久々津君がさっさと私を好きだと言ってくれないからこんなにイライラする。

イライラする。

イライラする。

イライラスル。

「お姉ちゃん。お風呂空いたよー」

不意に部屋のドアが開き、パジャマに着替えた風呂上りの理安が部屋に入ってくる。そんな理安を、私は鋭い目つきで睨みつけた。

「勝手に入って来ないで」

「えっ……あ……ごめん……。でもそんなに怒ること」

「いいから出てって」

冷たく言い放つと、理安は何か言いたげな表情を見せたけど、すぐに私の部屋から出て行った。

私はその時理安に八つ当たりをしてしまったのだと、気付いたのはもう皆が寝静まった後だった。

その翌日、私は目覚ましにセットしていた時間より一時間も遅く起きてしまった。リビングにはかわいらしいメモ用紙で書き置きがあり、「起きないから先に行くね」と書いてあった。両親は二人共仕事に行ってしまったので、家に今いるのは私だけだ。

この時間だと遅刻は確定。深く溜息をつきつつ、私は洗面所へ向かった。ボンヤリとした頭を起こすために、冷たい水で顔を洗い、正面の鏡に視線を向けて

私は、戦慄した。

「嘘……誰……？」

ゲッソリとやつれた頬。目の下に出来たくま。まるで骨と皮だけで出来てみたいに細い手。艶やかだった長い黒髪と肌は、まるで何日も手入れしていないかのように荒れていた。

鏡に映っているのは、私だった。

「い、嫌……嘘……」

よるめいて、その場へ尻餅をつく。鏡には、怯え切った表情になった私を映し出していた。

「嫌あああああああつ！」  
その絶叫を最後に、私は意識を手放した。

目を覚ました時には、既に昼を過ぎていた。洗面所で気絶したまま、私は眠りつづけていたらしい。リビングへ行き、時刻を見るともう四時前だ。学校はもう放課後だろう。

お腹が空いているハズなのに、何かを食べようという気になれない。何か食べなきゃいけないくらい衰弱しているのはわかつていのに、どうしても何かを食べようという気にはなれなかった。

そつと。自分の頬へ触れた。ちよつと自慢だったハリのある肌は、随分とざらついていた。何だか怖くなって、私はすぐに触るのをやめてしまう。

「こんなんじゃ……」

こんなんじゃ、駄目だ。

こんな私じゃ、絶対に駄目だ。

ブルブルと。自分の身体が震えるのがわかった。

「こんな私じゃ」

久々津君は、絶対に好きだなんて言ってくれない。

自室へ行き、私はすぐに例の紫鏡を取り出した。変な装飾のされた、紫色の手鏡。

何でも願いを叶えてくれる、不思議で素敵な紫鏡。

そつよ。鏡に頼めば良い。簡単なこと。

久々津君に、私を好きになってもらおう。

どうしてこんなに簡単なことに今まで気が付かなかったんだろう。すぐにカッターを取り出して、自分の指を傷つける。滲み出た真

っ赤な血を、私はすぐに紫鏡へと一滴落とした。すると、鏡はいつものように、私の血を吸っていく。

「お願い……久々津君に、私のことを好きだと思わせて」  
躊躇せずに、願った。

私が叶えたかった、願いを。

「これで……これで久々津君は……」

呟いて、安堵の溜息を吐いた　その時だった。

「え……？」

不意に、耳鳴りがした。耳鳴りは次第に大きくなっていき、私の両耳を支配していく。

耳鳴り。耳鳴り。耳鳴り。耳鳴り。耳鳴り。

「何よ……これ……」

ぐにやりと。視界が歪んだ。否、世界が歪んだ。

机が、窓が、ベッドが、床が、天井が、ぐにやぐにやと歪んでいく。

「気持ち悪い……」

部屋を出ようとしたけど、他の物と同じように歪んでいるドアは、どれだけ動かしても開こうとしない。

次第に歪んでいた世界は、紫色に変色していく。

まるで、異次元。

唯一歪んでいないのは、左手に持っている紫鏡だけだった。

「嫌っ……！」

紫鏡が、真っ赤に染まっていた。まるで血のように、鮮やかな赤色。

「たす……けて……っ」

その場へへたりこみ、そう呟いた。誰も助けなど、来るハズもないのに。

理安はまだ帰らない。両親はまだ帰ってくる時間じゃない。この家にいるのは私ただ一人だというのに、誰が私を助けようか。

こんな、ゾンビみたいな姿になった私を。



「助けてえ……っ！」

かすれかけの声で、必死に叫んだ。でもそれは、叫びどころか大声にすらならなかった。私の声は、どこにも届かない。

徐々に、意識が薄れていく。意識を保ってられない。

ああ、死ぬんだな。と、何故か直感的に理解した。

「くぐ……っ……く、ん……」

呟き、意識を手放そうとした。その時だった。

「詩安！」

勢いよく、さっきは開かなかったドアが外側から勢いよく開いた。部屋の中へ駆け込んできた白いシルエットは、私の方へ素早く近寄ると、私の左手から鏡を叩き落した。

ガシャンと音がして、叩き落された衝撃で鏡が割れる。と、同時に歪んでいた世界は徐々に戻っていく……。

「え……え？」

状況が理解出来ず、私はキョロキョロと辺りを見回した。

「シロ……？」

私の隣で、床に落ちた鏡を見つめつつ少しだけ表情をしかめているのは、シロだった。

白いセミロングの髪に、白いワンピースという真っ白な出で立ちのその幼女は、超会に所属している謎の幼女だ。いつからか超会本部に出入りするようになって、いつの間にか超会のメンバーになっていた、本当に謎だらけの女の子。

「……紫鏡」

ボソリと。あまり感情の込められていない声で、シロは呟いた。

「詩安の生气、吸い取ってた」

「この……鏡が？」

コクリと。私の問いにシロは頷いた。

「詩安の願いを叶える代わりに、その鏡は詩安の血を吸った」

抑揚のない声でそう言いつつ、シロは割れている鏡を見つめる。

「その血を媒介にして、鏡は詩安の生気を吸っていた」

「え……」

チラリと、床に転がっている、割れた鏡へ視線を向ける。願いを叶える紫鏡。私の血を吸って、それを媒介に生気を吸っていた……。私は、この鏡に利用されていた……？

「後少しで、すごく『良くないもの』が、その鏡から出てくるところだった」

「すごく良くないものって……何？」

あまりにアバウトな解説に、私がそう問うと、シロは小さく首を左右に振った。

「わからない。わからないけど、良くないもの。詩安にとって……危険なもの」

危険なもの……。

鏡が怪しいとわかっていながら、私は自分の欲に溺れて使い続けていた……。この仕打ちは、当然のしっぺ返しなんだと思う。

シロが来なければどうなっていたことか……。

「良かった。間に合って」

「そういえばどうしてシロはここに……？」

私がそう問うと、シロは静かにドアの方へ視線を向けた。その視線の先にいたのは、安堵の溜息を吐きつつ私達を見つめる、久々津弘人の姿があった。

「なんかやつれ方がおかしいと思ったら……変なことに巻き込まれてたみたいだな……。シロ、詩安は無事なんだな？」

久々津君の言葉に、シロは小さく頷いた。

「俺がシロに相談したんだよ。何の連絡もなしにお前が休むなんて妙だし、理安からも『お姉ちゃんの様子がおかしい』ってメールも着てたしな」

それでシロと久々津君はここに……。

無事で良かった、と微笑む久々津君を見つめている内に、自然と

涙がこぼれてきた。

馬鹿だ私。 あんな鏡の力で、無理矢理私は久々津君を自分のものにしようとしていた。 そんなこととして、仮に久々津君が私を好きになつて……それで良いハズがないのに。

「お、おい、泣くなよ…… そんなに怖い目に」

久々津君が言葉を言い終わらない内に、私は自然と久々津君へ飛び付いていた。 久々津君の胸の中でボロボロと涙をこぼす私の頭を、久々津君はそつとなでてくれた。

欲しいものは、自分で掴み取る。

もうあんなものになんて頼まない。 ホントに欲しいものは、自分で手に入れなくちゃ。

だから私は、いつか久々津君に自分で言わなくちゃいけない。 ちゃんと、伝えなくちゃいけない。

自分の言葉で、ちゃんと。

だからそれまで、首を洗って待ってなさいよ、久々津君。

## ひな祭りアドミレイション

ひな祭りシーズンがやってきた。節分もバレンタインも過ぎ、二月も終盤にさしかかった頃、ここ蝶上町の商店街では、ひな祭りの歌が流れ始めていた。

俺、久々津弘人くつひろとは、そんな商店街を一人の少女……もとい少女と共に歩いてた。右手には買い物袋、左手には幼女の右手。まるで俺がその子の兄であるかのような状態だが、血は繋がっていない。

買い物袋の中には、今日の藤堂家の夕食の材料が入っている。トランプで遊んで、負けた奴に罰ゲームを与えるのは良いけど、だからってその権限をフル活用して自分の家の夕食の材料を買いに行かせるのはどうかと思う。

まあ、女装させられるよりは遥かにマシだが。

そんなことを考えながら歩いていると、手を繋いでいる幼女シロがピタリと足を止めた。ショーウィンドウを凝視しているらしく、シロの足はまるで地面に縫い付けられたかのように、俺が手を引いても動こうとしなかった。

「どうかしたのか？」

真っ白なセミロングの髪と、真っ白なワンピースというこれでもかという程真っ白な出で立ちのシロは、俺が話しかけても反応せず、ジッとショーウィンドウを眺め続けていた。

シロの視線の先、ショーウィンドウの方へ視線を移すと、そこにはひな人形が飾られていた。美しく精巧なひな人形達がひな壇に飾られている様は、ひな祭りと縁のない男の俺にとっても、美しく感じる事が出来た。

「……欲しいのか？」

そう問うと、シロはほんの少しだけ肩をびくつかせ、素早くこちらへ振り向いた。

「……何が？」

「何って、ひな人形だよ」

「弘人、欲しいの？」

「いや、俺がじゃねえよ」

「ひな祭りうれしい？」

「俺は別にうれしくねえよ」

「弘人女の子説？」

「こじつけることすら難しそうな新説はやめろ！」

「弘人男の娘？」

「その話はこないだ詩安とやったわ！」

「シンクロニシティ」

「いや、たまたまだと思う」

「敗北を知りたい」

「それは最強死刑囚だろー！」

次回から白格闘技と黒格闘技の全面戦争が始まります。

始まりません。

結局あのは、アホな会話を続けつつ超会本部へと戻った。超会本部ってのは蝶上町第三集会所のことで、元々は町民達が様々な集会を行ったりするための場所だが、現在は超会という妙な団体の本部になってしまっている。

俺の住む町、蝶上町は少し……というかなんかおかしい。この町では、普通では起こりえない現象　超常現象がどういうわけか頻繁に起こるのだ。幽霊は勿論、未確認生物に未確認飛行物体、流石に未確認生命体とやらは出そうにないものの、普通ならあり得ない出来事がポンポン起こってしまうのがこの町、蝶上町だった。

そしてその超常現象達を調査、解決するために結成されたのが、ボスこと藤堂鞘子<sup>（いそはつみづこ）</sup>さん率いる超常現象解決委員会、通称　超会。

俺もシロも、その超会のメンバーである。シロに関しては、いつの間にか超会本部に出入りするようになっていただけで、正式にメンバーになっているわけではないみたいだが、アイツは俺達の仲間だ。超会のメンバーだと俺は思うし、皆もそう思ってるハズだ。

「シロがひな人形を？」

キョトンとした表情で問うてくる詩安に、俺はああ、と短く答えた。

「ひな人形かあ……懐かしいなあ……。小さい頃は毎年飾ってたよねー」

感慨深そうな表情でそう言った理安に、詩安も同じような表情を浮かべてそうね、と答えた。

放課後、超会本部へ向かっている途中に偶然河瀬姉妹に出会った俺は、この間の商店街でのシロのことを話していた。

「やっぱりひな祭りって、女の子にとって大事なのか？」

「うーん。昔はそうだったけど、今はどうかしら……」

口元に右人差し指を当て、詩安は少し考え込むような仕草を見せた。

河瀬詩安。河瀬姉妹の姉で、長い黒髪と釣り目が特徴的な少女だ。少し前はその艶やかな黒髪とはある事件で荒れまくっていたのだが、それは一時的なもので、今はすっかり元の艶と美しさを取り戻している。

「今は全然気にしてないよねー。お母さんは一昨年くらいまでは毎年飾るかどうかに訊いてきたけど、毎回めんどくさーいって断っちゃったし」

そう言って笑った理安に釣られて、詩安も笑みをこぼす。

河瀬理安。こちらは河瀬姉妹の妹で、茶髪のツインテールと姉とは対照的なたれ目が特徴の少女だ。大人しめの姉とは対照的に、笑顔の絶えない天真爛漫な理安は、超会ではムードメーカー的なポジションにいる。

そう、お察しの通り二人共超会のメンバーだ。

「シロもあのくらいの年なら、ひな祭りしたいって思ってもおかしくないと思うよ」

「だよな……」

シロはその素性の一切が不明である。親や兄弟がいるのかどうかもわからないし、どこから来て、どこへ帰って行くのかもわからないのだ。超常現象の調査で、夜間に外出しても誰にも咎められていないようだし……。このことについては、気にはなってもあまり触れないようにしている。もしかするとデリケートな問題なのかも知れないし、シロにはそういうことを気にせず、ただ超会にいる時間を楽しんでいて欲しい。

「なあ、俺達でシロのためにひな祭り、やってやれないかな？」

俺のその提案に、詩安も理安も一樣に表情を明るくした。

「良いねそれ！ 理安は大賛成！」

キヤツキヤとはしゃぐ理安の隣では、詩安もニコリと笑みを浮かべている。

「久々津君にしては上出来ね」

「俺にしてはって何だよ……」

呆れた口調でそういう俺に、詩安は小さく笑みをこぼした。

「でも、ひな人形はどうするの？」

「どうするって……河瀬家からお借りして」

「うちのひな人形、親戚にあげちゃったわよ？」

詩安の言葉に、俺はえ、と短く声を上げて呆けた表情を浮かべた。

「あ、そういえばそうだったねー。ボスに借りたらー？」

「ボスかぁ……」

持ってなさそうだな、勘だけど。

「ひな人形？ そんなのとつくの昔に誰かにあげたわ」

案の定、ボスの返答はこうだった。

超会本部へ辿り着き、シロがまだ本部へ来ていないことを確認す

ると、俺はシロのことを話し、ボスへひな人形を借してもらえるかどうか訊いてみたのだが……俺の嫌な予感は的中しており、やはりボスはひな人形など持っていなかった。

藤堂鞘子 通称ボスは、その名の通り超会のボスであり、超会を創設した張本人である。高身長と真つ赤なシャギーボブの髪型が特徴の女性で、年齢についてはコメントを控えさせていただく。

「そうですね。キャラじゃないですもんね」

「そうね。私は毎年ぼんぼりより爆弾にあかりをつけるタイプの女の子だったから」

「怖えよ！ 毎年ひな壇爆破かよ！」

「私はただ静かに暮らしたいだけなのよ」

「S市住まいの殺人鬼！？ 切った爪の長さでも測ってんのか！？」

「今週は八十九センチ、絶好調だわ」

「一週間でギネス級！？ トラクローより長いわ！」

「絶好調な上にひな祭りだし、今年はあかりつけようかしら……」

「爆弾にか！？」

「ひな人形に」

「直火焼き！？」

ていうか持つてんなら貸して下さいって。

超会本部から帰る途中、俺は商店街に寄り（寄るとは言っても家とは反対方向なのだが）、例のひな人形が飾られているショーウィンドウの場所まで来ていた。

「高え……」

値段は、高校生の財布でどうにかなる値段じゃなかった。流石にこの値段は親にもボスにも頼めないし、バイトなんかしてたらひな祭りが過ぎてしまう。俺がシロに買ってやれるのは、せいぜいひなあられくらいのもだった。

「くそ……」



自分の無力さに、俺は齒噛みするしかなかった。何か、何かしてやりたい。そんな気持ちばかりが膨らむだけで、結局俺は何もしてやれない。所詮は高校生のガキ、そんな俺が誰かにしてあげられることなんて、高が知れている。

流れているひな祭りのうたが、小さな女の子の望みさえ叶えてやれない俺のことを嘲笑っているかのように流れ続けていた。

ぼんぼりにあかりどころか、お内裏様もお雛様もいやしない。

「どーしたもんか……」

溜息を吐きつつ、そんなことを呟いた　その時だった。

「お母さん、あたしねー、おひなさまみたいになりたーい」

「ゆっちゃんならなれるわよ」

「ほんとー？」

何気ない親子の会話が、俺の耳に届いた。

おひな様みたいに……なりたい？　女の子の言葉を心の内で繰り返し、俺はある案を思いつく。

豪華じゃないけど。

ショーウィンドウの中にあるひな人形みたいじゃないけど。

でも、多分それが、俺　いや、俺達がシロにしてあげられる、精一杯だ。

すぐに携帯を取り出し、理安の携帯へと電話をかける。

「理安、ちよつと頼みたいことがあるんだが……」

三月三日。女の子の健やかな成長を願う、ひな祭りの日。日本の女の子は大抵この日を経験し、何らかの形でひな人形を一度は見ることになる。お内裏様と、おひな様、三人官女に五人囃子など、美

しく精巧に作られたひな人形達ひな壇の上に並べられている様は、見ようによつては不気味ではあるものの、それでもどこか美しく見えるものだ。

「まさかホントにあるとはな……」

超会本部の、押入れの中からそんなことをぼやく俺に、理安は引き戸の向こうからすごいでしょー、と答えた。

「去年ね、シツクオ@東方は赤く燃えている（ハンドルネーム）さんとオフ会した時に使ったやつなんだよー」

名前については色々ツツコミたいところがあるが、とりあえずそのシツクオ@東方は赤く燃えているさんには感謝しなきゃいけないな……。心の内でそんなことを呟き、俺は押し入れの中で嘆息する。

「配役が気に入らないけど、まあ今回は大目に見てあげるわ」

「悪いな、詩安」

俺の言葉に、詩安は澄ました声でそう答えた。

「それにしてもこれ、中々考えたわね……。やるじゃないの久々津君」

感心した様子でそう言うボスに、俺はありがとうございます、とだけ答え、ボンヤリとシロのことを考えた。

アイツが何者で、どこから来て、どんな事情を持っているのかは知らない。もしかするとこれは、アイツにとつては余計なことなのかも知れない。だけど、俺はアイツに……シロに何かしてやりたい。無表情なまま、滅多に笑わないシロを、ちょっとだけでも良いから笑わせてやりたい。お菓子くらいしか俺達に頼まないアイツに、もっと頼って良いんだって……ちょっとくらい、ワガママ言っても良いんだって、思わせてやりたい。お前のちょっとした望みくらい、叶えてやれるんだって、教えてやりたい。

「ひろっちー出来たよー」

「おう」

理安にそう答えると同時に、俺は押し入れの引き戸を開けた。

いつものように、超会の本部に向かっていた。小さな歩幅で、ゆつくりと歩いて、白い少女は……シロと呼ばれているその少女は、超会の本部へ向かっていた。

今日は三月三日、ひな祭り。そんなことをボンヤリと思い出したが、シロは小さくかぶりを振った。

関係ない。そんな言葉を、心の内で小さく呟いて。

人並みを求めて良いような存在じゃない。そんな風に考えて、シロは脳裏を過るひな人形をかき消した。

ボソボソと。商店街で聞いた歌を何気なく歌ってみる。

歌っているというよりは、歌詞を呟いているだけだった。透き通った彼女の小さな声は、少しずつ歌詞を紡いでいく。

これで良い。

これで満足だ。

ひな祭りは、気分だけで良い。後はひなあられでももらえれば上々だ。

そんなことを考えつつ、呟きながら歩いていると、いつの間にか超会本部に辿り着き、シロはそのドアをゆつくりと開けた。

「っ！」

開けた瞬間、紡いでいた歌詞が数瞬止まってしまふ程、驚きの光景がそこには広がっていた。

いつも中心に置いてある長机は撤去されており、代わりに木で出来た、ボロボロと言っても問題ないような、そんな三段分のひな壇が設置されていた。

一番下には何も置かれておらず、二段目には三人官女が。そして最上段には お内裏様だけがニコリと微笑んだまま鎮座していた。

あかりのつけられたぼんぼり。飾られた茶道具や花。笑顔でこち

らを見ている見知った顔の三人官女。赤髪官女と、黒髪ロングの官女と、茶髪でツインテールの官女。髪型のバラバラな官女には、少しかだけ違和感を覚える。そして最上段右側に鎮座する、これまた見知った顔のお内裏様。

どれも拙いけれど。

飾りも足りないし、五人囃子もないけど。

それでも、シロの目には、商店街のショーウィンドウで見たあのひな人形と、何故か重なって見えた。

「……せーの！」

不意に、お内裏様がそんな声を上げた。すると、三人の官女はニコリと笑って、真っ直ぐにシロの方へ視線を向けた。

「これ……」

お内裏様達が歌い始めたのは、つい先程までシロが歌っていた「ひな祭りの歌」だった。

歌が、想いが、ジンワリと暖かくシロの中へと浸透していく。ゆつくりと、優しく、なでるような歌声。

合唱が終わる頃には、いつの間にかシロの目から、温かいしずくがこぼれ落ちていた。

「え、あ……お、おい……」

かなり困惑しつつ、俺は慣れないお内裏様スタイルのままひな壇を降りると、慌ててシロの方へと駆け寄った。いつも表情を変えないシロが、突如涙を流し始めたことに、俺だけじゃなく、詩安や理安、ボスでさえも困惑を隠せない。

理安とシツクオ@東方は赤く燃えているさん（他多数）の用意した三人官女とお内裏様のコスプレ、学校から借りてきた合唱用のひ

な壇、少ない小遣いで買い集めた、安物の飾り……。それらを見渡して、情けなく肩を落とす。

「やっぱこんなんじゃない、駄目だよな……。」

「え、えつと……なんか、ごめんな。こんなんで……やっぱ、駄目か？」

身を屈め、シロと視線を合わせてそう問うた俺に対して、シロは涙を拭いながら首を左右に振った。

「……違う」

そう、呟くように小さく言って、シロは顔を上げた。

その顔は、俺達が今まで一度も見たことのないような笑顔で彩られていて

「ありがとう」

満面の笑みとは、言えないけど。理安みたいに、天真爛漫な笑顔じゃないけど。

その笑顔は、シロにとっては一番の笑顔だって、そう思えた。

「……そっか」

そう言って頬を綻ばせた俺に、シロは笑顔のままコクリと頷いた。  
「よしじゃあ！ シロも着替えよっかー！」

いつの間にかひな壇を降りた理安が、どこから取り出した小さな「おひな様」の服に、シロは視線を向けると、口を開けて啞然とした表情を見せた。

まさかそんなものまで用意してくれているなんて。と、そう言いたげな顔だと、俺には見えた。

「今日は貴女が主役（おひな様）よ、シロ」

そう言ってニコリと微笑むボス。

「カメラ用意してるから、シロが着替えたら取りましょ」

そんなことを言って、クスリと笑みをこぼす詩安。

「弘人……皆……」

俺達の顔を順番に見ていき、シロは先程と同じような笑顔を見せて

「ありがとう」

もう一度、そう言った。

その後は、おひな様スタイルに着替えたシロ（余談だが、サイズのことであってシロの分だけは新しく注文したもので、俺達全員が割り勘してなんとか買うことが出来た）と一緒に写真を撮り、いつもみたいに馬鹿みたいな会話をして、はしゃいで、ひなあられを食べて……服装以外はほとんどいつもと同じ。だけどその日は、俺達の、勿論シロの、忘れられない日になったと思う。

その時に撮った笑顔のシロは……俺達にとって、かけがえのない一枚になった。

## ドリームオブレイニーデイ（前書き）

今回はPixivで活躍しておられる椿 龍燕さんのオリキャラである、「迦桜鴉<sup>かるあ</sup>」とコラボさせていただいた話です  
椿さんほんとありがとうございます！

椿さん     <http://www.pixiv.net/members.php?id=2369442>

## ドリームオブレイニーデー

まるでバケツをひっくり返したかのような大雨だった。

登校時は軽く曇っている程度だったから、傘がなくても何とかなるだろうと楽観的に考えた俺を、まるで嘲笑うかのように雨は午後から降り始めた。何故か妙に強い風もあいまって、横殴りになっている雨粒は容赦なく俺の顔面へ叩きつけられる。

髪の毛の先から靴下の中まで全身ズブ濡れ。カッターシャツはビショビショのスケスケで、現在俺の姿は誰も得しないスケスケサービスモードだ。

上半身にまとわりつくカッターシャツと、歩く度にグチヨグチヨと不愉快な音を立てる靴下に舌打ちしつつ、俺　　久々津弘人くつひろとはどこか雨宿り出来る場所を探して全速力で走っていた。

「超会どころじゃねえな……」

いつもなら、学校の後は超会ちょうかいの本部へ直行なのだが、流石にこの状況だと本部より先に家に帰りたい。ビショビショの状態で本部へ行っても、本部の中までビショビショになるだけだし、どうせ行くにしても一度家で体勢を整えるべきだろう。

超会。というのは超常現象解決委員会の略称で、超常現象解決委員会とは、この町　蝶上町ちやうじやうまちに存在する非公式の団体のことである。この町は、どういうわけか通常では起こり得ない超常現象が頻繁に起こる。幽霊にUFOに妖怪、果てにはUMAまで何でもござれとも言わんばかりの超常現象発生率であり、そのバリエーションも何故か豊か。そんな超常現象達を解決するために、ボスこと藤堂鞘子によって作られたのが超常現象解決委員会、通称　超会。そして俺は、その超会の数少ないメンバーの一人だ。

雨にビショシと打たれながらも走り続けたが、依然として雨宿り



出来そうな場所は見つからない。車道では車が通り過ぎるばかりで、傘を忘れてズブ濡れになっている哀れな男子高校生を助けてあげようなどと考えてくれるドライバーは一人もない。まあ、当然だけど。

これからは鞆の中に折り畳み傘を常備しておこう、とボンヤリ考えつつ、俺と同じくビショビショになっている鞆をチラリと見た直後、俺はピタリと足を止めた。

目の前にあるのは真っ赤な鳥居と石段。そこにあるのは間違いない。

「神社だ」

ボソリと呟き、俺は急いで鳥居の下をくぐり、石段を駆け上った。こんな場所に神社なんかあったのか、と疑問に思いはしたが、今はそんなことはどうでも良い。とにかく雨と風をしのげる場所に逃げ込まないと……。

体力測定の時でも出せないような速度で石段を駆け上り、俺はすぐに屋根のある社殿へ、駆け込み、賽銭箱にすぐるようにしてその場へ座り込んだ。

風のせいで横から少し雨粒に打たれはするが、上からの雨粒を防げただけでもかなり違う。社殿の外にいるよりは今の方がよっぽどマシだった。

「ふう……」

安堵の溜息を吐いた後、俺はバッグの中から財布を取り出し、中から百円玉を取り出すと、賽銭箱の中へと投げ入れた。

何の神様かは知らないが、とりあえず感謝。

ついでに財布の中を確認したが、バッグの中にあっただけで中身は無事なようだった。

再び安堵の溜息を吐き、俺は財布をバッグの中へ収めた。

この神社、どういうわけか人の気配が全くしない。神主さんや巫女さんがいてもおかしくないハズなのに、まるでここに誰もいないかのように気がない。

もしかするとここは廃神社なのかも知れない……。そう考えると、ちょっと不気味だが背に腹は変えられない。とりあえず、雨が落ち着くまではここで雨宿りしていよう。

廃神社だと思い始めた途端、賽銭箱に入れた百円玉が惜しくなってきたが、もう入れてしまったものは仕方がない。ちなみに、確認すると賽銭箱の中には百円しか入っていないかった。

つまり、俺は廃神社にある空の賽銭箱の中に、全く意味のない寄付をしてしまったことになる。

どうせ入れるならコンビ二に置いてある募金箱に入れて、世界の恵まれない子供達に寄付した方が良かった……。などと後悔しても時既に遅し。

軽く溜息を吐きつつ、俺はビショビショになって身体に張り付いているカッターシャツを脱ぎ、軽くその場で足元へ絞った。

すると、まるで水を染み込ませた雑巾の如く水が滴り落ちていく。同じようにして靴下も脱ぎ、絞る。流石にズボンまで脱ぐ気にはなれなかったから、とりあえずカッターシャツと靴下だけ。

カッターシャツと靴下を、干すようにして賽銭箱の上へ広げ、俺は犬のように頭をブルブルと振って濡れた髪から水滴を飛ばした。

雨の勢いは、弱まらない。

「……親に電話すりゃ良いじゃん」

馬鹿か俺は。

携帯あるんだから、親に連絡して車で迎えにきてもらえば良いだろ。

簡単なことに今まで気付かなかった自分に呆れつつ、思ったより早く家へ帰れることに喜びながらバッグから携帯を取り出し、画面を開いた。

一面闇。

画面は真っ黒なまま、どのボタンを押してもうんともすんとも言わない。電源もつかない。雨の中で壊れてしまったんじゃないかと心配したが、そういえば電池なかったなと思い出し、ただの電池切

れであることを理解する。と同時に、自分の間抜けさにこの短時間の内の何度目とも知れない溜息を吐いた。

「アホだ……俺……」

自分が哀れ過ぎて何も言えねえ。

ガツクリと肩を落とし、恨めしそうに地面へ降り注ぐ雨粒を眺めていた。その時だった。

「あのー」

不意に、剥き出しの背中へ声が飛ばされた。

「えっあっはい!？」

突然のことに驚きを隠せず、声を裏返ししながら振り返る。

「だあれ？」

背後にいたのは、あどけない表情を浮かべた一人の少女だった。着物風の服を着たその少女の年齢は俺と同じくらい……のようにも見えるが、それよりも幼い印象も受ける。黒く長い髪は腰元まで伸びており、湿気の多い雨の日だと言うのに、その艶は美しく保たれている。長い髪から少しだけはみ出ている耳は、まるで鳥の羽のような形をしており、人目で彼女が人間ではないということが察せられる。首元には三日月の形をしたネックレスがかけられており、彼女を美しく装飾している。

「あの……服……」

彼女は右手で俺を指差すと、どこか言いにくそうにそう言った。

あ、そっぴや俺今上半身裸じゃん。

「うわ、ちよっ……!」

慌てて生乾きのカッターシャツを身に着けました。

「かるあ？」

「うん、迦桜鴉<sup>かるあ</sup>」

ベッタリと身体に張り付くカッターシャツの不快感に耐えつつ、彼女の名乗った名前を俺が復唱すると、彼女　かるあはコクリと

頷いた。

俺がカッターシャツを着た後、ちょこんと俺の隣に座ったかるあは、まだ何も話していないのにも関わらず、もう既に楽しそうな表情を浮かべていた。

「あなたは？」

「俺か？ 俺は……久々津弘人」

「ふーん、ひろとかー」

何がそんなに楽しいんだ？ と問うてしまいたくなる程、かるあはニコニコと微笑んでいる。

「えっと、かるあ……は、ここの神社の人？」

一瞬呼び捨てにするかさん付けにするか迷ったが、何だかるあは「さん」って感じじゃないので呼び捨てに。同い年くらいっぽいし。

「うん、そうだよー」

「あ、なんかごめん勝手に雨宿りしてて……」

そついや俺無断で雨宿りしてんだよな。

でもこの神社、入った時人の気配は全くなかったような……。それに彼女の耳、あの耳は明らかに人間のものじゃない。ああいうのに慣れている俺だから驚かないけど、よく考えたらかるあって「超常現象」の類っぽい。

「いいよいいよー！ 雨宿りくらい！ それにひろと、おさいせん入れてくれたし……」

「お賽銭？ ああ」

さっき入れた百円玉のことか。

てつきり意味のない寄付になってしまったんじゃないかと思っていたが、そういうわけではないらしい。百円玉が無駄にならなかつた安心感と、この神社に誰かがいた、という安心感が同時に訪れ、俺はほっと胸をなでおろした。

「おさいせんありがとー！」

「いやいや、こっちこそサンキュ。雨宿りさせてもらって、助かつ

てるよ」

「へへー」

かるあはにんまりと笑うと、賽銭箱を叩きながらも一度「おさいせんありがとー！」と繰り返した。

見た目は高校生くらいなんだけど、その仕草や言動はどこか幼い。下手すりゃ小学生くらいなんじゃないかと思う程だ。

「ひろと！ ひろとは雨好き？」

不意に、かるあはそんなことを俺へ問うた。

「いや、俺はあんま好きじゃないな……今日もこうして酷い目にあったし」

とりあえず今日の大雨のせいで、しばらくは雨なんか大嫌いです。「そっかー。かるあも雨きらいい。空とんでる時、羽がぬれちゃうもん」

あ、やつぱ人間じゃないんだ。

害はなさそうだし、とりあえず深く言及はしないでおく。

「でもね、今は好き」

「今は？」

「うん」

屈託のない笑顔を浮かべ、かるあはやや大げさな動きで頷いて見せた。

「だって、神社に人が来てくれたから！」

「それってもしかして……俺のこと？」

うん、と頷き、かるあはもう一度屈託なく笑った。

ただ雨宿りするために来ただけなのに、そんな風に喜ばれると何だか照れ臭い。自分の顔が徐々に赤くなっていくのを感じ、俺は咄嗟にかかるあから目を逸らした。

「こうしてだれかとお話するの、ひさしぶりなんだー！」

瞬間、柔らかいものが俺の冷えた身体に触れた。

暖かい温もりが、雨で冷え切った俺の肩を少しずつ温めていく。しばらくその温もりを堪能し、俺の表情が少しにやけ始めた頃……

やつとのこととでその柔らかさの正体に気がついて、俺は慌ててかるあを俺の身体から引き離れた。

「な、何で抱き付くんですか！」

うるたえ過ぎて敬語だし、声裏返ってるし。

「うるたえちゃだめ！ ドイツ軍人はうるたえない！」

「ドイツ軍人だろうがなんだろうが、女の子に抱きつかれたらうるたえるわ！」

「シュトロハイムはうるたえなかったよ？」

「お前抱きついたことあんのかよ！？」

「うん、足のあたりに。シュトロハイムをとりこみながら」

「サントナじゃねえか！ 危うく俺も取り込まれるところだったわ！」

「だきついちゃだめ？」

「駄目です、うるたえるので」

「あああんまりだアアア」

「それはエシディシだろ」

サントナなのかエシディシなのかハッキリしろよ。

それにしても、さつきからピコピコとかわいらしく動いているかるあの耳が気になって仕方がない。最初に見た時からずっと気になってはいたんだが、ああもピコピコ動かれると余計に気になってしまふ。何度か触ろうと手を伸ばしたが、流石に急に触るのは失礼なのでやめる。でも「耳触つても良いですか？」って断ってから触るのもなんかおかしい……つつか変態臭い。

「かるあはね、神さまなんだ……」

不意に、外で降り続けている雨を眺めながら、かるあは呟くようにしてそんなことを言った。

「神様？」

「うん、この神社でまつられてる神さま。だからえらいんだよ！」

どやつ！？　とでも言わんばかりの表情（つまりドヤ顔）で、両手を腰にあてて胸を張るかるあ。

彼女の、かるあの言うことが本当なら、彼女に関する色々なことに合点がいく。かるあが人間じゃないと思しき発言をしたことも、人間のものとは思えないあの耳も

そして、何故この神社に人がいないのかも。

この神社には、人の気配がない。まるで廃神社であるかのように。

こうしてだれかとお話するの、ひさしぶりなんだー！

そう「ひさしぶり」なんだ。ここに人間がいるのは。だからかるあは現れた。久しぶりに会えた自分以外の誰かと「お話」するために。

「どう？　かるあってすごいでしょー！」

無邪気に見えた、かるあのその瞳の奥に、どこか寂しげな色が隠されているように見えた。

「ああ、すごいよ」

ポンと。かるあの頭の上に右手を乗せる。最初は呆気に取られたような表情をしていたかるあだったが、やがて嬉しそうに……でも少しだけ恥ずかしそうに、頬を赤らめてニコリと微笑んだ。

「ねえ、雨はもう、やんじゃうのかな？」

不意に、先程までと比べてかなり弱くなった雨を眺めつつ、かるあは不安そうにそう言った。

「かるあは……やだよ。雨がやんじゃうの」

屋根にたまっていた雨の雫がこぼれ落ちて、泥が少しだけ跳ねた。「雨がやんだら、ひろとはかえっちゃうから……」

「来るよ、また」

俺の言葉に、かるあは驚いたように眉をピクリと動かした。

「雨が止んでも、また来るよ。賽銭入れに……今度は皆も連れて」詩安に紹介すれば、どんなことを言うだろうか。詩安はきくと、

かるあと仲良くしてくれるハズだ。

理安は多分、耳を触りたがるだろうな……。

ボスはどうだろ？ あの人見かけによらずかわいい物が好きらしい（詩安調べ）から、かるあのことを沢山愛でるのだろうか。

そしてシロは……多分、かるあと一緒にお菓子でも食べるだろ。

そんな他愛のない想像を膨らませていると、かるあは寂しそうな視線を俺へと向けていた。

「……かるあ？」

俺の言葉に、かるあは言葉では答えない。ただ悲しげに、首を左右に振るだけだった。

「ひろと……わすれないで」

そつと。かるあは俺の、まだ乾き切っていない身体に顔を埋めた。冷えた俺の身体を、もう一度かるあの暖かい温もりが温めていく。今度は、離さなかった。

しばらくそうしていた後、かるあはそつと俺から離れると、付けていた三日月形のネックレスを外し、そつと俺へ差し出した。

戸惑いながらも俺がそれを受け取ると、かるあは嬉しそうに笑みを浮かべ

「ありがとう」

と、そう言った。

静かに目を開けると、既に空は赤く染まっていた。

一瞬どういふことなのか理解出来ず、俺はポリポリと頭をかきながらこれまでの出来事を反芻し　すぐにかかるあの姿を探した。

でも、そこにはかるあどころか神社すら存在しなかった。

「ここって……？」

俺が倒れていたのは、何もない空き地だった。



どうやらしばらく意識を失っていたらしく、雨は既に止んでいた。  
「……夢？」

かるあも、神社も、まさか大雨ですら……と思ったが、自分が素足であることに気付き、やはり夢ではなかったと判断する。

俺のすぐ傍に、ほとんど乾いている靴下と靴、そしてバッグが置いてある。やっぱり俺はここで雨宿りをしていたハズ……なんだ。

だけど、俺が雨宿りをしていた神社はどこにもなくて。

「かるあ……」

呟いても、彼女の姿は見当たらない。

ふと、自分が右手に何かを持っていることに気が付き、ゆっくりと握っていた右手を広げてみる。

俺の右手が握っていたのは、かるあから受け取った三日月型のネックレスだった。

ひると……わすれないで。

「忘れないよ」

独り呟き、俺はネックレスをそっと握り締めた。

蝶上町には、既に取り壊されてしまっている神社がある。

鴉の神様を祭っていたその神社はもう取り壊されてしまっていて、その場所は今空き地になってしまっている。

だけど時々、空き地になっているハズのその場所に、神社の姿が見えることがある。

その時はどうか、神社に行ってあげてほしい。それで、百円くらいで良いから、賽銭箱にお金を入れてあげてほしい。

彼女はきっと、喜ぶだろうから。

## そこに咲くスミレ

これは、子供の頃の話。

私がまだ小さくて、何も知らなかった頃の話。

まだ生まれて十年も経っていなかった私には、友達と呼べるような相手は全然いなくて、いつも一人ぼっちでいた。

当時九歳。小学三年生の春。

四月、十七日。

一人ぼっちの帰り道には慣れていた。

みんなが楽しそうに談笑しながら帰っているのを横目に見ながら、私は地面を見つめていた。

今日はこんな石が落ちてるなあ。

今日はこんなゴミが落ちてるなあ。

昨日落ちてたあのゴミはどこへいったんだろう？

そんな、どうでも良いことばかり。

当時の私は、誰かと話するのが苦手だったらしく、入学してすぐに誰かに話しかけることが出来なかった。

入学前の友達とは皆別の学校へ行ってしまったため、新しく友達を作らなきゃいけなかったんだけど、当時の私にはそんなことが出来るハズがなくて、自然と一人ぼっちになっていた。

去年の家庭訪問の時、先生が母にこんなことを言っていた。

「鞘子ちゃんはいつも一人で、心配です」

その日以来、母が私の学校生活のことをしきりに心配するようになった。

一人だつて、問題ない。ちゃんとやっていける。テストの点数だつて取れる。

ただの強がりだつて、今ならわかる。だけど当時の私は、肩肘を張つて頑なに大丈夫だつて思い込んでいた。友達なんていなくても大丈夫だつて。

ただ、ちよつと寂しいだけで。

そうして入学から二年が過ぎて、三年目の春がきた。

四月十七日。

私の誕生日。今年で、九歳。

祝ってくれるのは家族だけだったけど、それでも私はご馳走やプレゼントが楽しみで、帰路の足取りは自然と軽くなっていた。

そんな、時だった。

「こんにちは」

歩く私の前に、立ちふさがるようにして女の子が現れた。

私が前を見てなかったただけなんだと思うけど、その子は足音も気配もなく、まるで突然そこに現れたかのようなだった。

下を見ていた私が、その子が女の子だと気付けたのはその子がスカートをはいていたつてだけなんだけど……。

顔を上げると、三つ編みの女の子がいた。

当時の私と同じくらいの年齢。多分九歳か十歳くらいに見える女の子だった。

「えっと……」

返答に困っていると、女の子は不意に私の手を取った。

「行くう」

「ど、どこに……？」

女の子は内緒、とだけ答えて、ちよつとだけ強引に私の手を引いて駆け出した。

しばらく一緒に走って、女の子は公園の前でピタリと止まった。

「今年はこちらまでっ」

「今年……？」

女の子が何を言っているのかはわからなかったけど、同年代の女の子と話するのは年単位で久しぶりだったせいで、昂揚感が違和感を打ち消してしまっていた。

「あの、名前……」

口にして、先に名乗るべきだったと後悔した。だけど、その時女の子はニコリと笑って答えてくれた。

「私はすみれ。貴女は？」

「私は……鞆子。藤堂鞆子」

「それじゃあ、さーちゃんだね」

あだ名をつけられたのは、その時が初めてだった。

嬉しくて嬉しくて、目の前にすみれちゃんがいるのに、私はにやついた笑顔を浮かべてしまっていたのを今でも覚えている。

「じゃあ、来年はここで会おうね」

「来年って……明日は会えないの？」

私の問いに、すみれちゃんは寂しそうに首を振るだけだった。

「じゃあね、さーちゃん」

「あ、すみれちゃん！」

すみれちゃんはずぐに私に背を向けて、どこかへ駆け出して行った。途中までは追いかけられたんだけど、いつの間にかすみれちゃんはどこかへいなくなってしまうていた。

四月十七日。

すみれちゃんに出合ってから一年が経った。

あれから一度もすみれちゃんに会うことはなかったし、私は何度もすみれちゃんと初めて会った場所と、別れた場所　公園に行ってみたけど一度も会うことが出来なかった。

この一年の間に「友達」と胸を張って言えるような相手は出来な

かったものの、前と比べて人と話すことが出来るようになっていた。もしかすると、私にも友達が出来るかも知れない、そんな風に考えるようになっていた。

そうして迎えた四月十七日、私はすみれちゃんとの約束通り学校の帰りに公園へ行った。

すると、約束通りすみれちゃんは公園の入り口で待っていてくれた。

「あ、さーちゃんだ」

一年も経てば、背も少しは伸びるだろうし何かしら変化はあるはずなのに、すみれちゃんは一年前と何も変わっていないかった。

でも当時の私は、すみれちゃんにもう一度会えたことが嬉しくて、そんなことなんか気にならなかった。

「じゃ、行こ」

「どこに？」

その時もすみれちゃんは、内緒、としか答えなかった。

すみれちゃんは去年と同じように私の手を引いて駆け出した。前は緊張と昂揚感が気が気でなかったけど、その時は少しだけ落ち着いていて、すみれちゃんがどこに連れて行ってくれるのか楽しみだな、なんて考えるようになっていた。

今度は森の入り口辺りですみれちゃんは止まった。

「それじゃ、今年はここまで」

今年は、ここまで。

ということは、来年も会える……そう考えて、私は微笑んだ。

「あ、あのね……すみれちゃんのこと……」

「なあに？」

顔を赤らめてもじもじする私を、すみれちゃんは笑って待っていてくれた。

「すーちゃん、って呼んで良い……？」

今思えば、ビックリする程安直な名前だった。すみれの「す」ですーちゃん。一文字違えば、どこぞの釣り漫画のおじいちゃんにな

ってしまうような名前。勿論当時はその漫画のこと知らなかったけど。

すみれちゃんは、しばらく呆気にとられたような表情を浮かべていたけど、すぐに笑顔を浮かべて

「ありがとう。私達、友達だね」

と、そう言った。

その時の笑顔が、泣き出しそうな笑顔だったことに気付いたのは、その日からもう何日も経った後だった。

次の年も、その次の年も、すーちゃんは私の前に現れた。同じ日の、同じ時間帯に、必ず。私の……誕生日に。

毎年会う度に、すーちゃんは私の手を引いて森の奥へと進んでいく。森の中は、日中でも少し暗くて怖かったけど、すーちゃんと一緒だったから、大丈夫だった。一人で帰るのは少し怖かったけど。

すーちゃんはいつも「今年はここまで」って言うと、しばらくして私を置いてどこかへ行ってしまう。すーちゃんがどの学校に通っていて、どこに住んでいるのかもわからなかったけど、私はすーちゃんに何も聞かなかった。

流石に私も十一歳になった頃には、毎年会っているのを見た目が全く変わらないすーちゃんに違和感を覚え始めていたけど、それでも私は何も聞かなかった。

もしかすると、その時点で既に私は半分気づいていたのかも知れなかった。

そして、すーちゃんに会うようになってから五回目の誕生日。

中学校に入学する頃には、私にも友達が出来ていた。

私がこうして他の人と話して、友達になれるようになったのは、すーちゃんのおかげだ。あの時、すーちゃんに会わなければ、私は変われなかったような気がする。

すーちゃんは特に何もしていない。突然現れて、私の手を引いて森の中へ連れて行くだけ。今思えば、すーちゃんと出会ったことと、友達が出来たことは全然関係がない。だけどその時の私は……いや、今も私は、すーちゃんのおかげだと思っている。

だから私はその日、私はすーちゃんにお礼を言おうと思った。

友達になってくれて、ありがとうって。

その年も、すーちゃんは私の前に現れた。いつも通り私の手を引いて、森の奥へと走って行く。

最初に会った時と、全く変わらない姿で。

もう、私の身長は彼女を優に越えていた。違和感はあった……けど、それを問うのはいけない気がして、私は問うことが出来なかった。

だからその時は、今年はどこまで行くんだろう？ などとそんなことを考えながら、すーちゃんに手を引かれるままに進んで行った。去年止まった場所も過ぎて、ドンドン走って行って、不意にすーちゃんはピタリと止まった。

木漏れ日が綺麗な場所で、そこはこの森の中のどこよりも綺麗に見える場所だった。

「綺麗……」

傍に立っている大きな木を眺めつつ、そんなことを私が呟く。すーちゃんはきつと、この綺麗な景色を私に見せたかったんだ。と、その時は思っていた。

「今年はこちらまで？」

すーちゃんが言うよりも先にそう問うと、すーちゃんは困ったように笑っていた。

「すーちゃん、あのね」

私が話を切り出すと、すーちゃんはなあに？ と首を傾げる。

「私ね、すーちゃんに感謝してる」

「どうして？」

キョトンとした表情を浮かべるすーちゃんの手を、私は強く握った。

「私、すーちゃんのおかげで友達が出来たんだ！ すーちゃんが友達になってくれたから、私、勇気が出た！」

その言葉を聞いて、すーちゃんは嬉しそうに微笑んでいた。

「そっか。良かった」

まるで自分のことみたいに、すーちゃんは心底嬉しそうな笑顔を見せてくれた。

「だからね……その……ありがとう」

「うん。私こそ、ありがとう」

そう言ったすーちゃんの言葉に、私は首を傾げた。

「毎年毎年会ってくれて、ありがとう。いつもいつも、今年はダメかな……って私心配してたの」

少しだけうつむいて、その後すぐにすーちゃんは顔を上げた。

「でもさーちゃんは、毎年来てくれたね。ありがとう」

お礼を言われたのが照れ臭くて、私は少しだけうつむいてしまっていた。

「今年で、おしまい」

「え」

すーちゃんの言葉に、私は息を飲んだ。

「もう、着いちゃった」

「着いちゃったって……だからって、何で今年でおしまいなの？」

不安げな声音でそう問う私に、すーちゃんは何も答えない。ただ寂しそうに、笑顔を浮かべるだけだった。



「それじゃ、後はお願いね」

スウツと。すーちゃんの後ろの景色が見えた。

景色の中に、少しずつすーちゃんがとけていく。

「え……すーちゃん……！？」

握っていた手の感触が、だんだんなくなっていった。

「ありがとう、さーちゃん」

すーちゃんの後ろの景色が、だんだんクッキリとしていった。

「ちゃんと、見つけてね」

声も、どこか遠く聞こえ始めて。

気が付いたら、そこにすーちゃんはいなかった。

何度も辺りを見回して、必死に姿を捜したけど、すーちゃんはどこにもいない。もしかしたら、来年もまた来れば会えるかも知れない……そんな考えも心の片隅にはあったけど、理解していた。もう会えないと。

ちゃんと、見つけてね。

その言葉の意味が理解出来なくて、私はその場でわんわん泣いた。ただただ泣いて、泣き腫らして、私はトボトボと家に帰った。

きつと会える。

そう信じて、私は次の年も四月十七日に森の中へ向かった。だけど、いくら待ってもすーちゃんは姿を現さなかった。

気が付けば、去年すーちゃんと別れた場所。

そこは去年と変わらず綺麗で、またしても私は見とれてしまった。

ちゃんと、見つけてね。

ふと、すーちゃんのことを思い出す。

何か、見つけてほしいものでもあったのだろうか。そう考えて、私はここで何かを探してみることにした。何を探せば良いのかわからないけど、何か見つかるかも知れない。

そうして探すこと数分。私は大きな木の後ろ側で、言葉を失った。

骨、だった。

学校で見かけた骨格標本のよう……人間の骨。でも学校で見かける骨格標本とは違って、その骨は小さかった。

まるで、小さな女の子みたいに。

自然と、涙がこぼれた。

その骨は、すーちゃんみたいな体格で、すーちゃんみたいな服を着ていて、すーちゃんみたいなの……

「すー……ちゃん……っ」

傍に、スマレが一厘咲いていた。

かんざきすみれ  
神崎純玲。

私がすーちゃんに出会う二年前から行方不明になっていた女の子。それがすーちゃんだった。

彼女が私を毎年森の中へ連れて行っていたのは多分、私にあの骨を……見つけてほしかったからだっただんだと思う。年に一度、少し

ずつだけ案内して、私に見つけ出してほしかったんだと思う。

すぐに見つけてあげられなくて、ごめんね。

あれからもう何年も経って、私は大人になったけど、すーちゃん  
のことは片時も忘れていない。彼女の、今にも泣き出してしまいそ  
うな笑顔が、忘れられない。

四月十七日。

この日がくると、決まって私はここに訪れる。

すーちゃんに、会いに。

「ありがとう、すーちゃん」

木漏れ日に照らされながら、私はそつと、囁くようにしてそう言  
った。

今もあの場所に、スマレは咲いている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7414z/>

---

超会！ スピンオフ

2011年12月27日20時53分発行